

聖書：マタイ 8：23～27

説教題：どうして怖がるのか

日時：2019年1月6日（朝拝）

今日の箇所ではイエスが舟に乗ると、弟子たちも従います。すると湖は大荒れとなり、舟は大波をかぶりました。この湖はガリラヤ湖で、周囲を山々に囲まれて、すり鉢状の形をしていました。そのため、気温の変化等によって突然、嵐になることがたびたびあったようです。激しい暴風が吹き下ろして、弟子たちが乗った舟は木の葉のように翻弄されたのでしょうか。「大波をかぶった」とありますように、舟には水が入って来て、まさに死と背中合わせの、次の瞬間にはどうなってしまうかというような困難のただ中に彼らは置かれていました。

まず注目したいのは、なぜこんなことになったのかということです。もし弟子たちがイエス様の言うことを聞かずに勝手に湖へ漕ぎ出して行ったのなら、これは彼らへの罰だと見ることができます。しかし彼らはなぜこの時、湖の上にしたのでしょうか。それは18節に記されていますように、イエス様が彼らに向こう岸へ渡るように命じられたからでした。そして23節にある通り、イエス様がまず舟にお乗り込みになりました。弟子たちはただそのイエス様に従っただけです。ここから分かることはイエス様に従う生活にも嵐はあるということです。罪がなくても試練は起こる。もし私たちがこの点で信仰生活に関して誤った考えを持っていると、試練に会った時に非常に悩みに陥ると思います。すなわち正しい信仰の状態であれば、その生活はスムーズに行くはずであると。そう考えている人は問題が何か生じると、なぜこんなことが起こったのか、神は私を何らかの罪ゆえに嫌っておられるのではないかと受け取るようになってしまいます。本当は少しもそうではないにもかかわらず。また他の人の苦しみもそのように見てしまいます。あの人があのような苦しみに会っているのは何か隠れた罪を犯したからに違いない。悔い改めるべきことが何かあるのだろうと。しかしそのような因果関係は今日の箇所に示唆されていません。確かにそういう場合もあります。暴飲暴食すればお腹をこわして苦しむように、自業自得の苦しみもあります。ですから思い当たることがあるなら、そのことはもちろん悔い改めるべきです。しかし今日の箇所では弟子たちは主に従っただけです。なのに、このような試練へと導かれた。このことはこういう種類の試練があるということを私たちに改めて思い起こさせてくれます。こういうことは信仰者にとって普通にあることである。ですから私たちは何か思わぬ状況に投げ入れられたからと言って、

それで慌てふためくべきではないということになります。主はそのことを通して何かを教えるために、そして私たちを一層の祝福へと導くために、このような試練に合わせることをなさるのです。

あるいは前の段落ともっと直接的に結びつけて考える方が良いかもしれません。イエス様は直前の22節で弟子志願者に対して、「わたしに従って来なさい」と言われました。そして今日の23節には、そのイエス様に弟子たちが「従った」とあります。そういう主に従う弟子たちにこの嵐が臨んだ。すなわち主の弟子の生活はやはり安易なものではない。弟子として主について行く生活には困難がある！試練がある！主が目的を持って導く学びの時がある！ということです。

さてこの大荒れの湖の上にあった弟子たちはどうだったのでしょうか。彼らは近寄ってイエス様を起こして「主よ、助けてください。私たちは死んでしまいます。」と言いました。ペテロをはじめ、ここにいた弟子たちの多くはもともと漁師でした。この道のプロでした。そしてこのガリラヤ湖は彼らの仕事場でした。その彼らはこのような嵐を何度も経験した人たちとして、できることは色々やったと思います。それでもなす術がないような状態。いかにこの時が危険な状態であったかが見えて来ます。その中で彼らはイエス様に助けを求めてすがりました。するとイエス様は何と言われたのでしょうか。イエス様は「どうして怖がるのか」と言われました。イエス様によれば、怖がる必要はどこにもないではないかということです。私たちの見方からすれば、どうしてそんなことが言えるのか。この状況で怖がるのは当然であって、「どうして怖がるのか」と仰るイエス様の方がおかしいのでは？と思います。しかしイエス様からすれば、いや怖がる方がおかしい、その方が不合理だということです。では弟子たちの何がおかしかったのでしょうか。イエス様はそのことについても述べています。「信仰の薄い者たち」と。すなわち信仰はあるけれども、それが貧しい状態にあるということが問題。もっとしっかりした信仰を持っていれば怖がる必要は全然ないということです。では弟子たちはどういふ信仰に立つべきだったのでしょうか。

考えられる一つのことは父なる神の摂理に対する信仰です。それはこの時のイエス様ご自身のお姿に示されています。イエス様はこの大荒れの湖の上であって、どうしていたでしょう。イエス様は舟の中で眠っていました。これはイエス様が私たちと同じ人間性を取ったことを示しています。イエス様は直前の箇所の人々を癒やすために多くの働

きをされて休みを必要としていました。ですからご自分と弟子たちの休息のために向こう岸へ渡ろうと言われたと考えられます。そのイエス様は舟に乗ったかと思うと、眠ってしまわれました。嵐の中でも起きませんでした。しかしこのことはもう一つのことも示しています。それは父なる神の守りに対する深い信頼です。イエス様は前に見た6章25節からの部分で、心配は無用であると言われました。6章25節：「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。」 イエス様がそこで仰ったことは、私たちにいのちを与え、体を与えてくださったのは父なる神であるということ。その神は私たち一人一人の人生に対して計画を持っておられ、それがみな成し遂げられるまでは私たちのいのちを守られる。ご自身が立てた計画が目的に達しない前に突然私たちのいのちが奪われるということはない。物事に偶然やアクシデントとはない。神は私たち一人一人に対して持たれた計画を最後まで導いた後、私たちを召される。神は一切を御手に治めている方として、そのように導かれると。その神への信頼をどこかに忘れ去って、ただあたふたしているだけではないのか。この嵐の状況も神の摂理の下にあるということです。

そしてここにはもう一つの意味もあったと考えられます。それはイエス様ご自身に対する信仰です。イエス様は神から遣わされ、この地上で神の働きをしています。これまでも様々なみわざをして来ました。全身ツァラアトに冒された人の癒し、百人隊長のしもべの癒やし、またペテロの姑の熱病、悪霊につかれた人、様々な病気の人をみな癒されました。そのような神の力が宿っている方が同じ舟に乗っているのです！なのにどうして怖がるのか！信仰が薄い！ということです。

そう述べて後、イエス様は起き上がり、風と湖を叱りつけられました。普通このようなことはあり得ないことです。人間がこういう状況ですであらうことはせいぜいお祈りです。しかしイエス様は命令しています。するとすっかり風になりました。瞬時にそうになりました。さっきまで荒れ狂っていた湖がウソのようにピタッと静かになりました。これを前にして彼らは驚いて言い合いました。「風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」 人間は今日、科学や技術の進歩によって多くのことができるかのように自負していますが、自然の力の前には無力であることをたびたびの自然災害を前にして思わされています。自然の力には勝てないと。しかしイ

イエスはたった一言でそれを静められました。旧約聖書には神こそ、海の騒ぎを静められる方であると述べられています。詩篇 107 篇 25 節 29 節：「主が命じて激しい暴風を起こされると風が波を高くした。」「主が嵐を鎮められると波は穏やかになった。」つまりこの湖の嵐をイエスが静めた出来事が示していることは、このイエスは神そのものではないのかということです。目の前にいるのは私たちと同じ人間のように見えるが、ただの人間ではない。人となられた神であるということです。その本質は神ご自身なる方。彼らはこうして目の前のイエスを新しい目で見ると導かれたのです。

さて今日の箇所は私たちにどう適用されるでしょうか。この記事を読む時に私が思い起こさずにいられないのが、今から 18 年前に日本長老教会のアジア宣教ツアーでフィリピンに行った時のことです。田舎の貧しい地域で宣教している牧師を訪ねた後、近くの火山島に船で渡ることになりました。たまたまその牧師がボートを持っているとのことで、それに乗せてもらえば、船賃として予定していたお金を献金として渡せるということで、そのボートに乗せて連れて行ってもらうことになりました。するとその牧師はしばらくその船には乗っていないから、今からまずガソリンを買って来ると言います。嫌な予感がしましたが、その後に目の前にしたのはやはり貧弱な舟。本当にこれで大丈夫なのか。定員ギリギリの 14 名で乗りましたが救命胴衣などももちろんありません。行きは昼間で波は穏やかでしたが、帰りは夕方 6 時を過ぎて風が強くなり、波も高くなり、私たちが乗ったボートはまさに木の葉のように翻弄されました。最前列に座っていた私は、波が打ち付ける数秒ごとに水を頭からかぶり続けました。空もだんだん暗くなり、風も波も強くなり、まさに「主よ、助けてください！」という世界でした。2～3 日後の日本の新聞に「フィリピンで日本の牧師たち十数名が水難事故」とニュースに出るかと思いました。

私は舟から振り落とされないようにしがみつき、頭から水をかぶりながら、ここでどう信じればいいのか、格闘していました。確かにこの状況も主の御手の中にあるということは信じている。しかしだからと言って無事に向こうの陸地まで着けるとい保証はあるのか。そこまでは言い切れない。クリスチャンで船や飛行機や車で事故にあって亡くなる人もいる。それならこの状況はどうなのか。ここで何を信じて今しばらくの時を過ごせばいいのか。摂理信仰を試されました。

もちろん結果がどうなるか前もって確言することはできません。しかしはっきり言え

るのは、この状況における主権者は主であるということです。主はこの時もすべてのことをご計画に従って導いておられる。その主がご計画に基づいて導いておられるなら、今厳しい状況にあるが、無事に向こう岸まで守られるということもあり得るのではないかと私は考え始めました。なぜならここにいる牧師たちに対する神のご計画が今日をもってみなゴールに達したということはありません。そうではないのでしょうか。そうであれば、神はこの状況からも救い出してくださるに違いない。そういう希望がわいて来ました。しかしもちろんこれは人間の考えです。次の大きな波によってこの舟がひっくり返って、ここで終わり！となるかもしれません。しかし仮にそうであってもこれはアクシデントではない。そういう計画を神が持っておられたということです。それは人間的には残念かもしれませんが、神がご計画くださったものなら神を信じる私たちにとっては最善のことです。今、その意味は分からなくても、天国に行った時に教えていただくことができる。その結果については委ねつつ、とにかく主が御心に従ってすべてを導いてくださる。そう信じつつ、祈りつつ、時を過ごしました。そうして対岸が見えて来て、無事陸に足を下ろした時は、本当に奇跡だと思いました。ずぶぬれになったお互いを見ながら感動しました。私はそれまでも摂理という聖書の教えをある程度は考えてきたつもりでいましたが、あの時はまさに死と隣り合わせの状況の中で、あらゆる時が神の摂理の御手の中にあるのだということを実感させられた時でした。

新しい 2019 年の歩みが開かれました。この年も主に従う歩みの中で色々なことがあると思います。今日の箇所のような試練も一人一人に用意されていると思います。そのような私たちに今日の箇所は何を語っているのでしょうか。それは主に従う弟子としてこの年、経験するであろうすべての嵐において主は私たちとともにいてくださるということではないでしょうか。神である方が人となって地上に来られ、私たちの代わりに十字架にかかり、復活して天に昇って行かれる前に、こう言われました。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」そして言われました。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」その約束の通り、主はこの年も私たちとともにいてくださいます。そして私たちが様々な試練に会う時、そのただ中で、「どうして怖がるのか」と問うてくださる。わたしがここにいるのではないかと。その声を聞いて歩みたいと思います。私たちは一人ではありません。私たちが主に従っているなら、私は主と同じボートに乗っています。そして主は私を導いて下さる師として、すべてのことの上に御手を置いて導いてくださいます。この主がこの年、私たちが経験するすべての嵐においてともにいてくださることを信じて、この方に

信頼し、導いていただく歩みへ進みたいと思います。そうして一つ一つの試練をくぐり
抜け、大切な学びをさせていただき、それを乗り越えるところに用意されているさらな
る成長と祝福へとこの年も導かれて行きたいと思います。